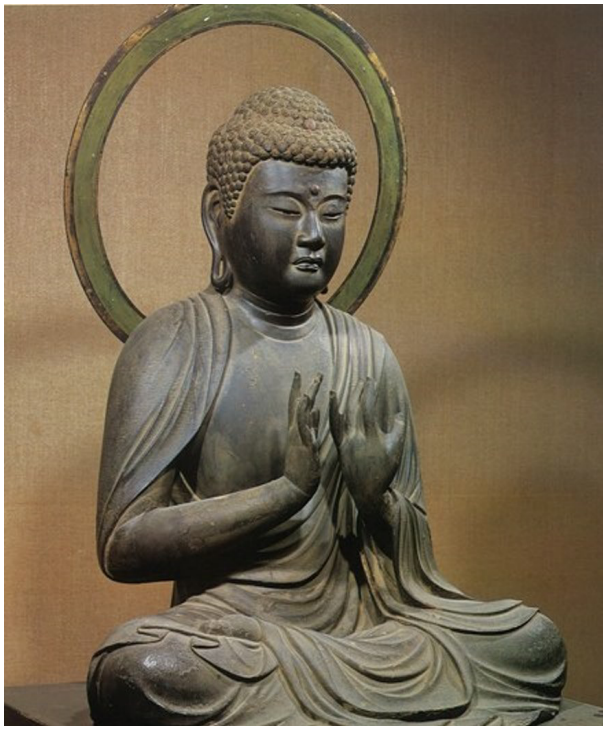
長谷寺かわら版
百日紅
86号
2013（平成25）年
8月1日

仏像への長い道（前編）


鎌倉極楽寺の釈迦如来坐像　端正なお顔ですね

☆仏と向き合うとき

あなたは、寺などにお参りをして仏を拝むとき、どんな気持ちで拝んでいるでしょうか。

日々の暮らしを反省して許しを請う。生かされていることへの、感謝の気持ちを伝える。「助けて欲しい」、「病気を治してほしい」。「試験に合格させて」とか、あるいは「お金が儲かりますように」とか、さまざまな願い事をしている。亡くなった家族を「いい所に導いて下さい」と、先祖供養の気持ちの人もいるでしょうか。

私たち坊主なら、仏さんに何かを頼むなんてことはしないでしょうから、「少しでもあなたに近づけますように」。・・あ、これも頼んでますね。「あなたに近づきたいです」と告白しているのかも知れない。

拙僧はどうかな。「生臭坊主でごめんなさい」というところでしょうか。

仏に向かうときの思いは、人さまざまでしょうが、仏さんは神さんではないので、何かを頼んでも叶えてくれるかどうかは疑問です。「神頼み」という言葉はあっても、「仏頼み」とは言いませんからね。

まあそれでも、願いを叶えてくれそうな仏さんたちもおられます。というか、お薬師さんや観音さんのように、みんなの願いを叶えるために生まれた仏さんたちもおいでですから、仏に対して願い事をするのは当然です。だけど、せっかく仏さんにお願いをするのなら、自分だけでなく、みんなの健康、みんなの交通安全をお願いしましょう。

☆人間釈迦

お薬師さんや観音さん、お地蔵さんなどは、仏教の教えの中から生まれてきた、いわば生粋の仏たちです。だから誕生日も命日もありません。縁日というのがありますが、あれは何なんでしょうね。実は私にもよく分かりません。

厳密にいえば、お薬師さんも観音さんも、もともとは人間のはずなんです。なにしろ人間でないと、悟りはひらけないことになっています。ただ、人間にしても、教えの中から生まれた、いわば架空の人間。だから誕生日は誰にも分からない。

しかし、あまたおわす仏たちのうち、お釈迦さんだけは間違いなく人間です。大昔のインド（いま「インド」と呼ばれている地域、というだけのことですけど）の人。だから母親のお腹から生まれ、80歳で亡くなりました。

誕生日は4月8日、命日は2月15日。それぞれ、仏生会と呼ぶ誕生会と、涅槃会と呼ぶ祥月命日の法要をします。

しかしなにしろ今から2500年くらい昔のことです。誕生日も命日も、そう伝えられているというだけです。

☆釈迦の名前

インドの人ですから、「釈迦」なんて名前のはずありません。本名はゴータマ・シッダールタ。

そのゴータマさんの尊称が「シャカムニ」で、これは「シャカ族の立派な人」という意味です。ゴータマさんは、シャカ族の王子でした。

この「シャカムニ」を漢字で「釈迦牟尼」と書きます。これを略したのが「釈迦」という名前。

「ブッダ」という呼び方もありますね。人間釈迦が修行を重ね、瞑想のはてに悟りをひらいてブッダになりはった。だからブッダもお釈迦さんの名前と思われていますが、古代インド語の「ブッダ」は、「目覚めた人」「さとりを開いた人」という意味です。ですから仏陀はお釈迦さんだけをさすわけではありません。「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」という言葉があるように、阿弥陀さんだって仏陀です。

インド語で書かれた経典を中国語（漢文ですね）に翻訳する時に、ブッダという音をそのまま生かし、「仏陀（佛陀）」という文字を当てました。単に「仏」と略すこともあります。

この他に「ほとけ」という呼び方もありますが、この言葉は「死者」という意味もあってちょっと使いにくいですね。

というわけで、本名ではありませんが、とりあえずここでは、呼びなれた「お釈迦さん」という名前を使うことにします。

☆釈迦は死んだ

ともあれ、数ある仏たちの中で、お釈迦さんだけは人間で、しかもすでに亡くなった人ということになります。お釈迦さんが、キリストのように復活したという話は聞きません。

亡くなってはしまったけれど、初めて教えを説いたということで、いまも信仰を集めているのでしょうか。

もっとも、亡くなってしまったのだから、拝んでも意味がないというわけでもありません。私たちは、なにより弘法大師を拝むし、亡くなったご先祖さんに対しても、追善供養だけでない接し方をします。私たちを見守って下さい、とか。

もちろん釈迦は、すでにそういう生物学的な生き死にとは別次元の存在であり、いまもおわすのだと、仏教の世界の中では位置づけられます。

お釈迦さんもお大師さんも、すでに亡くなった人ですが、信仰の対象になるためには、そういう宗教的な意味付けがなされなければならないわけです。

☆モデルはお釈迦さん

歴史的には、実は釈迦以外の仏たちの姿かたちは、お釈迦さんのそれをモデルにしたものです。だから、同じ作者の彫った仏像、描いた仏画なら、どの仏さんも、ほぼ同じお顔をしておいでです。ただ如来と菩薩で、身に着けているものが違うだけです。

阿弥陀如来とか薬師如来とか、名前に「如来（にょらい）」が付く仏たちは、シンプルに袈裟だけを身にまとっています。この姿は、悟りをひらいた後の釈迦がモデルです。だから飾りは着けていません。ちなみに「如来」という言葉は、「如実（真実）の世界から来た人」という意味です。

観音菩薩とか弥勒菩薩とか、名前に「菩薩（ぼさつ）」が付く仏のモデルは、悟りをひらく前の釈迦の姿。お釈迦さんは釈迦族のプリンス、王子さまですから、きらびやかな衣装や飾りを身に付けています。

菩薩というのは、「悟りを求める人」という意味で、いわば修行をしている存在ですから、きらびやかな衣装は本当は似合わないのですが、ビジュアル的に如来と区別するためにこういう姿にしたんでしょうか。

おたくにある十三仏の軸などを見ても、この一点だけ知っていれば、如来と菩薩だけはすぐに見分けがつくはずです。

ただ、それぞれどの如来で、なに菩薩に当たるのかを見分けるのは、そう簡単ではありません。持っているものとか、手つきとかで分かるのですが、この話は別の機会に譲ります。

☆釈迦の顔

長い前置きが続いていますが、実は仏像の話をしようとしています。タイトル通り、仏像に至る道は、かくも遠いわけです。

さまざまな仏像たちのルーツはお釈迦さんです。そのさまざまな仏像たちには、それぞれの個性というか特徴がありますが、ややこしいのでここでは歴史的存在としてのお釈迦さんの像に限定して話をします

加えて真言宗では、仏壇の本尊や、法事の際に掛ける掛け軸など、拝むのは仏像でなく仏画のことが多いですが、ここでは平面的な仏画も「仏の肖像」という意味で、「仏像」と表現する

ガンダーラ仏　西洋風の顔つきですね

ことにします。

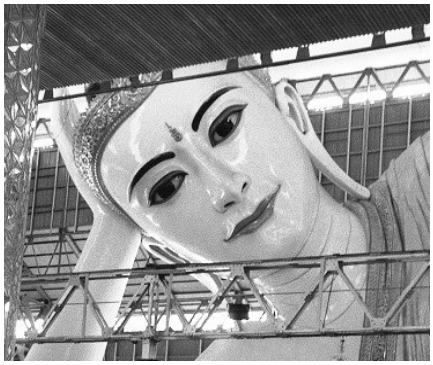
さて、私たちは仏像が、当然釈迦その人であるという前提で向き合っています。しかし仏像の顔は、本物のお釈迦さんの顔とは、あまりというよりも、むしろ少しも似ていないような気がします。

像に刻まれた、あるいは描かれた釈迦の顔つきは、地域あるいは民族によってさまざまです。「ありがたい」と感じる顔が、地域や民族で異なるからでしょうね。

ご承知のようにインド人の顔は、西洋人に近い、かなりバタ臭い顔をしています。お釈迦さんはインドの人ですから、きっとバタ臭い顔をしておいでだったのでしょう。

上に示した、ガンダーラとミャンマーの仏像の写真を比べてみて下さい。違いは一目瞭然ですね。

冒頭で紹介した鎌倉の極楽寺のお釈迦さんは、もちろん和製です。日本で作られる仏像は、やはりどこか日本的な表情をしていますね。日本人の顔をしていても、仏像はインド生まれのお釈迦さんであることを、少しも疑わずに拝めるわけです。考えてみれば不思議です。インドの人だということさえ、意識することもないのかも知れません。



ミャンマーの涅槃像　写真提供：井潟密雄さん

しかしまた、日本生まれの仏像は日本的な顔、日本人に好まれる顔をしているというだけで、決して同じ顔をしているわけではありません。どれも全然違った顔をしているはずです。

国や地域によってだけでなく、作る人によっても、釈迦の顔は異なるわけです。同一人物のはずなのにねぇ。

☆顔など誰も知らない

私たちは、日本に仏教が伝えられて以来、１０００年以上もお釈迦さまと信じてずっと拝んできたから、ほんとにこんな顔だったの？　なんて疑うことはありません。それにお釈迦さまを人間として意識することもありません。あくまで信仰の対象、拝む対象です。

しかし、釈迦が生きた時代の人なら、あるいは亡くなった後でも、釈迦の顔をまだ覚えている人なら、釈迦の顔をリアルに写した仏像でないと、これがお釈迦さまだといわれても、素直に拝むことはできなかったでしょうね。

でも心配することはありません。仏像が生まれたのは、釈迦が亡くなってから５００年くらい後のことといわれています。だから誰も、お釈迦さまの顔なんか知りません。

☆今回のテーマ

考えたいのは、釈迦その人と仏像は、どうつながっているのかということです。言い換えるなら、なぜ釈迦本人とは似ても似つかないはずの仏像を、お釈迦さんとして拝めるのか。

顔も覚えていないから、知らないからといって、偉大な存在だったというだけで、そのフィギュアに過ぎない、しかも顔も違っているかもしれない像を、拝めるわけでもないでしょう。

ちなみに、われらが空海、弘法大師のお馴染みの肖像は、直弟子（じきでし）の真如親王（しんにょしんのう）が、本人を目の前にしてスケッチしたものとされています。そういう裏付けがあるから、こういう極端にデフォルメされたものでも、空海と信じて拝めるわけです。

冗快さん作の、これもお大師さん

☆教えの残し方

ともあれお釈迦さまは、29歳のときに家族を捨てて修行の暮らしを始め、35歳で悟りをひらき、インド各地で教えを広めて、クシナガラという地で80歳の生涯を閉じたとされています。

釈迦は、死を目前にしたとき、自分の死後は、師である自分ではなく、教えそのもの（これを**法**といいます）を師とするよう、弟子たちに説いたといいます。

仏教は釈迦が説いた教えであり、大切なのは釈迦と

いう人間ではなく、彼の説いた教えそのものにほかならないのは言うまでもありません。

教えは生き続けますが、人は死んでしまいます。死んだ釈迦より、何より教えをこそ大切にすべきだというのは正しいですね。

師に先立たれた弟子たちは、釈迦の死後、まずその教えを忘れないように、師が口にしたことをしっかり記憶しておこうとしました。

ところで当時のインドは、文字はあったのですが、それが記録のために使われるという社会ではなかったらしいです。ですから、教えを残す作業は、釈迦の説いた、つまり自分たちが釈迦から聞いた教えの内容を、お互いに出し合って、間違いのないように、弟子たちの間で確認することから始まったらしいです。そしてその内容を、漏らさず、しかも間違いなく暗記し、口伝えで残すという努力をしたようです。

ただ、釈迦の教えを暗記するといっても、私たちにお馴染みのお経のような難解なものではなく、人としての生き方を語った、詩のようなものをイメージしてもらった方が近いです。

他人の間違いに目を向けるな。他人がした事、しなかった事に目を向けるな。ただ、自分がやった事、やらなかった事だけを見つめよ。

といったふうなものです。

☆仏典の結集

お馴染みの「般若心経」は、あまりに短かすぎるせいか、省略されてしまっていますが、教典の多くは「如是我聞」という言葉で始まります。読み下せば「是の如く、我聞けり」。

「こんな風に私は聞きましたよ」、「私が聞いたのは、こういう話ですよ」。釈迦の教えを伝えるときに、こうやって話し始めたわけです。なにしろ口伝えですからね。自分自身が耳で聞いた話を、そのまま伝えるわけです。そしてそれを聞いた人が覚えて、また次に伝える。

そしてその話のルーツはお釈迦さまということがポイントです。もともとは釈迦の口から実際に出た言葉であり、だからこそ意味があるわけです。

この、弟子たちによる釈迦の教えの内容確認の作業は、「仏典の結集」と呼ばれ、これがのちに作られる、文字化、文章化された「経典」の元になります。「こんな風に私は聞きましたよ」という語り始めの口調が、そのまま文章になって、経典の冒頭に記されたわけです。

ただ、釈迦の教えが経典として文字化されるまでには、釈迦の死後４～５００年という時間が必要でした。その長い長い時間、教えは口から耳へと伝え残されてきたわけです。　（つづく）

編集後記

◆遅ればせの新暦

お釈迦さんの誕生日に当たる４月８日の花祭りには、季節の花を飾った花御堂に誕生仏を安置します。参拝者は仏像に甘茶をかけ、喉をうるおし、中には容器に入れて持ち帰る人もいます。

うちではこれまで、旧暦の行事でした（ちなみに今年は５月17日）が、近年参拝者がめっきり少なくなってしまいました。わざわざ暦で旧暦を確かめてまでお参りするという時代でもないのでしょう。それに、甘茶で墨を磨っておまじないの文字を書くなんて習慣も、すっかり過去のものです。

たまたま今年は、結衆の花祭りの当番が当たりましたので、これを機会に新暦の行事に切り替えました。

というわけで花祭りは、桜の季節の行事に変更いたしました。どうぞお参りください。

◆カンパと切手

徳島市の福井幹代さんからカンパ、北九州市の村冨孝一さんから切手が届きました。ありがとうございました。

〒772-0004
鳴門市撫養町木津 1037-1
電話 088 - 686 - 2450
ﾌｧｸｽ 088 - 686 - 2130
E-Mail
cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp
URL
http://www.chokokuji.jp/